

北タイにおける土器製作の技術変化と社会環境

中村大介* 長友朋子**

1. はじめに

土器に関する民族学的調査は、日本の研究者を中心に近年盛んにおこなわれている。特に米を主食とする東南アジアは、日本列島との共通点が多く、野焼土器が現在も日常道具として使われているため、フィールドに選ぶ研究者は多い。そして、檜崎彰一らが東南アジアの土器製作村の分布図を作成して以降（檜崎・リーダム・ルイス2000）、これを基礎データとしながら、多くの研究者により実地調査が進められてきた。

その中でも、タイは多数の土器製作村が存在し、日本考古学に従事する研究者が考古学的な視点から土器製作に関する研究を実施している状況にある。筆者らもこうした研究を行っており、すでにいくつかの論考を提示しているが、2013年に行った調査でいくつか新たな知見を得ることができた。そこで、本稿では、これまで調査されたデータと比較しながら、新しい知見についての報告を行いたい。

2. タイにおける土器製作村の民族学的研究

最初にタイにおける土器製作村の民族調査の状況を簡単に述べておきたい。

土器製作や使用方法についての長期調査は、フィリピンのカリंगाにおけるロングエーカーの調査がその草分けであり、その調査に参加し

ていた小林正史がタイでの調査にこれを応用した。小林正史らは、2004年12月より始めた実地調査で、土器製作村内の製作者別に詳細なインタビューと製作記録を取り、多角的な角度からデータ収集と検討をおこなった。その結果、土器生産の地域差出現の要因、技術と生産様式の結びつきが明らかにされた（小林・徳澤・長友・北野2007a・b）。また、この調査に参加した筆者は、製作技術と製作時間との相関性から土器生産体制との関係を検討し、弥生土器生産への応用を試みた（長友2007、2008）。なお、土器生産体制に関しては、小林青樹による土器の規格度という視点からの検討があり、ロングエーカー・小林正史らが行ったカリंगा土器の規格度データに、東北タイのデータが加えられ、土器の規格度と專業度との相関性について言及されている（小林1998）。

窯についての研究も行われており、徳澤啓一は雲南省西双版纳や中部タイのスコタイの調査をまとめ、初現的な窯について精緻な報告をおこなった（徳澤・小林・長友2006、徳澤2008、2012）。筆者らも簡易な窯の構造や技術に着目し、野焼土器から窯焼成へと単純に展開するのではなく、窯焼成が野焼きに影響を与える場合があることを指摘した（長友・中村2011）。

製作道具については、叩き板に注目した研究が行われている。庄田慎也らは叩き板に着目し、その地域性の背景を探った（庄田慎也・安部久・能城修一・徳澤啓一・小林正史2010）。北野博史はさらに、1個の土器をつくるのにどのような道具が使い分けられているのかを丹念に検討

* なかむら・だいすけ

埼玉大学教養学部准教授，考古学

** ながとも・ともこ

大阪大谷大学文学部准教授，考古学

している（北野・小林2010、北野2012）。

以上の研究事例でみられるように、タイでは土器生産に関する総合的かつ詳細な研究が進められている。民族学的研究では、製作者が土器を製作している行為そのものを観察できるという点が大きな特徴であるため、考古資料ではわからない「製作者」、考古資料では残存しにくい「製作道具」や「燃料」、考古学者の類推を助けてくれる「製作時間」といった要素についての観察と記述に重点がおかれる傾向がある。

一方、前述したようにロングエーカーは長期間にわたってフィリピンのカリंगाを調査したが、同一の村を継続的に調査することで、土器や製作方法などの時間的変化についても観察し、言及している。土器製作村を取り巻く環境の変化を観察することによって、どのように製作者が社会的変化や環境変化に対応し、土器生産においてどの部分を変化させていくのかという点を追究することも可能なのである。

タイでも、中園聡と時津裕子が東北タイの土器製作を観察するなかで、伝統的ないわゆる「人間ロクロ」が減少し、「回転台」が導入され始めたという状況を報告している（中園・時津2004）。この際、中園らは土器製作時間が短縮できる回転台を「若い働き盛りの婦人」が採用し、熟年の婦人は採用しない傾向にあることを指摘している。小林正史らの調査でも同様の傾向が観察されていたが、中園らの調査も含め、調査した一時期を切り取ったデータしかないため、年月経過による回転台の採用拡大と製作者の年齢との対応が本当に正しいか不明であった。

そこで、筆者らは今回の調査において、時間経過によって土器製作が変化したかどうか、また、それがどのような背景と結びついているかを明らかにすることを目的に北タイのライ・クアン村という土器製作村で調査を行った。ここは、筆者らを含む小林正史を隊長としたチーム

で、2004年12月～2005年1月の乾季と、2005年8月～9月の雨季に、それぞれ約1か月間の調査をおこない、製作者個人ごとの精緻なデータを取り、2007・2008年には記録のアップデートを行った土器製作村である。また、2009年3月より、中園聡らも同村で調査をおこなっているため、長期間のデータが蓄積されている。それらと今回の、2013年5月時点の調査成果とを比較することで、さらに長くより有益な変化過程を復元することが可能である。表1はその内容を整理したものである。

3. 北タイ近郊の野焼き土器製作村

タイでは、タンボン、バン、モーティーという順に行政単位が小さくなる。バンは村と訳されることが多く、複数のモーティー（Moo Tee）で構成される。今回調査した製作村はタンボン・ハンケオの中にあるが、正確にはモーティー5のクァイとモーティー6のライであり、ここに土器製作者が集中して居住している。行政区としては2つからなるが、これらのモーティーは隣接しており、人々は相互に頻繁に行き来しているため、日常的にはひとつのまとまりをもっている。なお、モーティー5のクァイはクアンへと名称変更された。煩雑になることを避けるために、ここでは一旦、ライ・クアン村と呼称して論を進めたい。

(1) グループでの土器製作

婦人土器製作グループ ライ・クアン村ではD氏を中心に親戚や近所の親しい製作者を中心として土器製作グループを結成している。2004年段階ですでに土練り用の土練機を購入し、OTOP¹に出店するなど、作業の効率化や販売経路の確保を目指して動いており、グループに属さない製作者達とは異なる動きを示していた。

表1 ライ・クワン村の土器製作状況

Moo ti	住所	年齢 (2013 年5月 時点)	年齢 (2005 年1月 時点)	2005年の調査データ					2013年の調査データ				
				製作器種	製作期間	土練	所有農地	夫の職業	継続 の有 無	回転台か 固定台か	Dグ ループ 所属の 有無	製作 期間	
5 R23		39	*31							○	回転台	○	
5 R51		51	67	乾季小型、雨季大型	通年	雇用	0	無職	○	回転台	○		
6 1		51	43	大型主体	通年	雇用	0	仕事あり	○	回転台	○		
6 44		51	*43						○	回転台	○		
6 43		54	*46	雨季小型、乾季大型					○	回転台	○		
6 65		56	60	半々	9ヶ月以下	雇用	4(米)	×	○	回転台	○		10ヶ月
5 R104		57	*49						○	回転台	○		
6 23・1		58	*50						○	回転台	○		
6 95		58	*50						○	回転台	○		
5 R54-1		58	*50						○	回転台	○		
5 R121		59	*51						○	回転台	○		
5 R133		59	*51						○	回転台	○		
6 69		59	50	大型主体	10ヶ月	雇用	0	日雇	○	回転台	○		
5 R23		61	*58						○	回転台	○		
5 R105		63	*55						○	回転台	○		
6 53		79	70	雨季大型、乾季小型	9ヶ月以下	雇用	7(米)、1.2(果)	農業	○	回転台	○		
5 R10		63	*55						○	固定台	○		
6 78		?	?	大型主体	10ヶ月			?	○	回転台	×		10ヶ月
6 85		57	51	雨季小型、乾季大型	9ヶ月以下	本人	1.5(米)	×	○	回転台	×		5ヶ月
5 RW90		78	70	乾季小型、雨季大型	通年	本人	6(?)	×	○	回転台	×		
5 RW35		53	45	大型主体	9ヶ月以下	本人	0	機械工	○	固定台	×		
6 63		55	*47						New	固定台	×		
6 11		56	*48						○	固定台	×		
5 RW85		*56	48	小型主体	10ヶ月	雇用	4(米)、0.5(果)	農業	○	固定台	×		
5 R114		*57	65	大型主体	9ヶ月以下	本人	0	無職	○	固定台	×		
5 RW124		57	50	雨季大型、乾季小型	9ヶ月以下	本人	3+借地10	農業	○	固定台	×		
5 RW125		*60	53	不明	休止	雇用	0	日雇	○	固定台	×		
6 50		*62	54	大型主体?	10ヶ月	夫	6(果)	農業、日雇	○	固定台?	×		9ヶ月
5 RW42		*62	54	小型主体	10ヶ月	雇用	4(果)	×	○	固定台	×		
6 42		*63	55	不明	10ヶ月	本人	17(果)	×	○	固定台	×		
6 97		74	62	不明	通年	夫	3(米?)	農業	○	固定台	×		
5 RW25		?	?						○	固定台	×		
6 47		62	*54						○	不明	×		
6 48		66	47		通年	夫	借地	農業、日雇	○	不明	×		
6 66		69	60	大型主体	9ヶ月以下	本人	1.5(果)	×	○	不明	×		
6 92		*55	47	不明	通年	本人	0	×	○	不明	×		
6 51		*67	59	大型主体	9ヶ月以下	雇用	0	×	×	×	×		×
6 105		*73	66	小型主体	9ヶ月以下	夫	4(米)、0.5(果)	農業	×	×	×		×
6 108		*60	53				0	×	×	×	×		×
6 120		70	*62						×	×	×		×
5 R53		78	69	小型主体	通年	本人	0	×	×	×	×		×
5 R122		57	51	大型主体	通年	雇用	4(果)	農業	×	×	×		×
5 RW24		61	53	小型主体	10ヶ月	本人	0	日雇	×	×	×		×
6 49		*57	49	雨季大型、乾季小型	通年	本人	0	×	不明	不明	×		×
6 70		*47	39	大型主体	10ヶ月	雇用	0	運転手	不明	不明	×		×
6 81		*56	48	半々	9ヶ月以下	雇用	2(米)	×	不明	不明	×		×
6 89		?	?	不明	10ヶ月			?	不明	不明	×		×
6 100		*70	62	不明	9ヶ月以下	雇用	1.5(果)	仲買人	不明	不明	×		×
6 117		*70	62	大型主体	通年	夫		無職	不明	不明	×		×
6 119		?	?	不明	10ヶ月				不明	不明	×		×
6 126		*70	62	小型主体	10ヶ月	本人	0	料理人	不明	不明	×		×
6 135		67	67	大型主体	10ヶ月	本人	3(米)、13(果)、2(花)	無職	不明	不明	×		×
5 R11		*55	47	小型主体?	通年	雇用	0	日雇	不明	不明	×		×
5 R54		*57	49	不明	9ヶ月以下	雇用	0	工芸品製作	不明	不明	×		×
5 R54b		*80	72	大型主体	休止	雇用	0	×	不明	不明	×		×
5 R55		75	75	大型主体	10ヶ月	雇用	4(米)、5(果)	×	不明	不明	×		×
5 RW109		*56	48	不明	10ヶ月	夫	0	仲買人	不明	不明	×		×
5 RW120		*58	52	雨季大型、乾季小型	10ヶ月	夫	0	日雇(農園)	不明	不明	×		×
6 63		*69	62	大型主体	9ヶ月以下	雇用	0	×	不明	不明	×		×
6 121		*58	50	小型主体	通年	雇用	0	×	不明	不明	×		×

※2005年又は2013年の聞き取り調査の年齢よりわりだした年齢

現在OTOPでは、五つ星中、二つ星である。

このグループが結成された契機としては、1996年に日本の佐賀県吉野ヶ里で開催された炎の展覧会にD氏たちが招待され、自らの土器製作技術が海外から注目される価値を持ちうるものだという認識が広がったことがあげられる。また、それまで積極的に交流をもっていなかった、東南アジア各地の土器製作者が集結することで、新たな交流も生じたようである。ライ・クアン村のDグループもこれを契機に、北タイのランバン近郊に位置する、もう一つの土器製作村であるモンカオケオの土器製作者との交流を始めた。結果として土器製作者間の交流も広がり、情報交換が展覧会以前より頻繁になったものと思われる。

新たなプロジェクトの開始 今回の調査では、共同作業所の設置、回転台の導入、土練り専門の製作者をグループに取り込むなど、新たな動向がみられた。これは、2009年に「Siam Warataher-leasing」という会社がDグループを支援したことから始まっている。プロジェクトの名前は、「Oui-Son-Lan」と言い、これは年配者が子供たちに伝えるという意味である。対象となるのは10～15歳の子供である。調査最終日の土曜日に、Dグループがちょうどこのプロジェクト活動をおこなっていた。学校の教員も協力して、実際に土器を製作しながら作り方を教えるという、土器製作のワークショップであった(写真1)。子供たちは土器製作を楽しんでおり、女の子の中には将来土器製作をしたいと思う子供もいるという。

村の寺院のトップが交代すると、新たに就任したリーダーもこの活動を支援した。寺のリーダーは、最初に3000パーツを援助し、その後広告代2000パーツと教育支援のための6000パーツの合わせて8000パーツを出資した。これに伴い、2年前に1台1000Bで10台程度回転台を購

入し、2012年9月に共同作業所を作った。

共同作業場の設置と協業性 新たに再構成されたグループ構成員は17名で、約半数は共同作業場で、残りの半数は自宅で製作しているという。共同作業所はD氏の隣の土地に建てられた。土練りと成形を異なる土器製作者が分担し、焼成は共同でおこなっている。体力の必要な土練りをするのは2人で、交代で行っている。このうち一人は、土器製作ができるが、回転台は使用せず、固定台(人間ロクロ)を使用する(写真2)。また、もう一人は39歳と若い。製作する器種は、伝統器種のほか、需要に応じて新しい種類の土器も製作している。メンバーの中には、Dグループでは動物意匠を担当するが、土器は直接小売店に卸すという人物もいた。利益は、土器サイズに応じて分配しているという。

調査中、土練りされた胎土を共同作業場に購入してきた男性がおり、土も販売しているようで、19kgで35パーツだという。Dグループで製作した土器は共同製作所の隣に設置した販売所で販売しているが、調査中見た限りでは客の入り数が少なくあまり売れている様子がない。

回転台の導入 2004年12月時点で回転台を使用していたのはU氏1名のみだった。2007年の調査の際にも変化はなかった。しかし、2013年5月に調査した際には回転台の導入に進展があった。

新たに購入した回転台は、高さの高いものと低いもの(写真3)の2種があり、高い方が便利だという。同じ北タイのモンカオケオの様相に近い。ただし、同じタイ族の中国雲南省西双版纳曼乍村では地面に突き刺した棒を中心軸とする回転台を足で蹴って使用し、曼斗村では地面には突き刺さないが、足で蹴るタイプの回転台を伝統的に使用している(写真6～7)。ライ・クアン村で新たに導入した回転台は、高さも様々なだけでなく、手で回すという点において



写真1 Dグループのワークショップ



写真2 ライ・クワン村の固定台使用



写真3 ライ・クワン村の回転台使用



写真4 粘土紐をまとめて作る



写真5 手で回す回転台
(モンカオケオ村)



写真6 中国曼斗村の足による回転台使用



写真7 足で回転(曼乍村)



写真8 モーウブ(中央下2つ、Dグループの土器販売所)



写真9 ムアングン村で使用されているモーウブ

表2 Dグループの作成器種バラエティー

Moo-Nam	水瓶
Moo-Kang-Mee-Hu	
Moo-Kang	
Moo-Tom-Mee-Hu	把手のついた汁物調理用土器
Moo-Tom	汁物調理用土器
Moo-Kram	注口付土器。ハーブ茶を沸かす。
Moo-Ngvang	
Moo-Thom	別名モウカオとも呼ぶ。従来、炊飯用土器だったが、現在は骨納容器として用いられていることが多い。
Moo-Kra-Tang-Sai-Nam	
Tao-Hang-Lo	
Nam-Poo	噴水用土器
Chan-Rong	皿
Tad-Hung-Lo	
Moo-Lao	
Moo-Lao-Yang	
Moo-Oop	かつては米蒸し用の土器だったが、小さな土器を中に入れて焼成する窯道具としても使用される。
Moo-Pong	
Moo-Kao-Habb	
Kirang-Pai	ランプ
Moo-Nueng	
Moo-Hai-Kao	
Moo-Aeng	
Han-Nam	
Kom-Fai	ランプ
Moo-Nam-Yad	水を入れ寺院で使用する容器。文様が入る。

大きく異なっている。ライ・クエン村の高い回転台は、従来から使用している固定台に近い高さだが、椅子に座った姿勢で使用する点も関係するのだろう。

回転台の使用によって、技術も少し変化しているようにみえる。粘土紐をまとめて作り（写真4）、積み上げていく手順、粘土帯の間を指でなでる動作や内側に粘土帯を張りたす回数が増えている点である。また、インタビューでは製作時間が短縮できたとの返答があった。しかし、実際にこれまでの口縁部までを製作する第一工程の製作時間と比較してみると、人間ロクロが「7分43秒」、回転台が「9分13秒」であり、時間短縮にはつながっていなかった。これは同じP氏の2005年12月の製作時間と2013年5月の製作時間を比較した結果である。以前、固定台を使用するライ・クエン村と、回転台を使用するモンカオケオ村、曼斗村、曼乍村の比較を行っ

たが、製作時間に大きな差はなく、成形時の回転数と積み上げる粘土紐数が、回転台を使用する場合に多いという結果がでた（長友2010）。今回も同様の傾向をみてとることができること踏まえると、回転台の採用には別の理由があったと考えるべきだろう。

製作器種の多様化 聞き取りによる、製作器種のバラエティーは表2の通りである。この中に、モーウプ（口が狭い土器という意味）という器種がある（写真8）。この器種は窯焼成土器を製作する近隣のムアングンで、昇炎式窯の中で直接土器に火があたらないようにするために、焼成対象土器を入れる容器として使用されたことがあった。しかし、必要な量を供給できず、現在はDグループでは製作しなくなってしまい、後述するが、ムアングンでは窯焼成した自家製のモーウプが使用されている（写真9）。また、モーサイナムは本来米櫃だったが、現在はシャ

ワー用の水がめになっている。

(2)小売店の拡大

村のなかを通るメイン道路沿いに小売店があるが、そのなかでも土器を販売していた店が2年前から規模を拡大させていた。ライ・クエン村の土器もこの小売店で売られている(写真10～11)。それまでは、仲買人が土器製作者の家に土器を取りに来て、車で各地の小売店に運んで卸ろし、小売店から消費者へ販売していた。野焼土器は夕方に焼成し始め、翌朝には焼きあがって取り出せるくらいに冷めている。以前、仲買人が購入していた頃は、筆者らが午前9時～10時頃に村に到着すると、仲買人がすでに土器を回収した後であるのが通常だった。しかし、村の小売店が拡大し、客が頻繁にくるようになったため、小売店が直接土器製作者から購入して、客へ販売するという販路が開拓された。

また、時代の流れるにつれ、土器の使用が減り、アルミニウムの調理具に取って代わられたが、水がめやその他の土器の需要は依然として高いようである。小売店にも頻繁に客が来ており、土器製作者の手元に土器が売れ残って余っているという状況はみられない。

小売店で販売する土器は多岐にわたっている。近隣で製作された窯焼成の陶器(写真10)、窯焼成の土器、火鉢、野焼土器などである(写真11)。モンカオケオ村や他の土器販売店でも、窯焼成土器から野焼土器、火鉢まで幅広く扱うことで顧客を確保している。この小売店の場合、販売される野焼土器はライ・クエン村の土器、モンカオケオ村の土器などである。窯焼成土器は、スコータイやラチャプリなどから搬入している。火鉢も販売しており一部は自家生産している(写真12～14)。

火鉢は5サイズあり、最大から3サイズ下までの大型品を自家生産、残り2サイズの小型品を

サラピーというところから購入している。ライ・クエン村の土器製作者の一部にも火鉢をつくっているものがいた。自家生産分は、山岳民族である3人の男性を雇い、住み込みで作業をさせ生産している。電動の道具を使用して土練りし、型成形で製作する。作業は工程別に分担し、流れ作業で大量に生産している。火鉢には、ライ・クエン村の土器製作で使用している粘土は適さないため、ランパンの土を使うという。

この事例は、ある地域において、大きく異なる技術系統が生じる状況には、製作者自体もそれまでの製作者とは異なる場合があること示しているといえよう。モンカオケオ村でも、火鉢生産がおこなわれていたが、それは夫の仕事であり、伝統的な野焼土器を生産する女性は、製作にたずさわっていなかった。ただし、モンカオケオ村の場合は、焼成においては伝統的な製作技法で作った土器と、型成形の火鉢と一緒に焼成していた。

(3)グループ以外の土器製作者

土器製作をやめる者と土器製作を始める者が確認された。土器製作をやめる場合、その理由は高齢化、病気である。今回新たに土器製作を始めた人物のうち、インタビューできた女性は55歳であり、必ずしも若いというわけではない。様々な理由があると推測されるが、土器生産は、家にいながら収入が必要になった時に有効な手段であることは疑いない。

一方、Dグループに属さない土器製作者の中でも、少なくとも3名は回転台を導入していた。2人は50代であり、一人は78歳である。いずれも5年前に導入しているが、その理由としては、回転台を利用した方が楽だからということであった。しかし、同じ北タイのモンカオケオ村では伝統的に回転台を使用しており、その存在を知っていたにもかかわらず、5年前というタイ



写真10 ライ・クワン村の小売店（陶器販売）

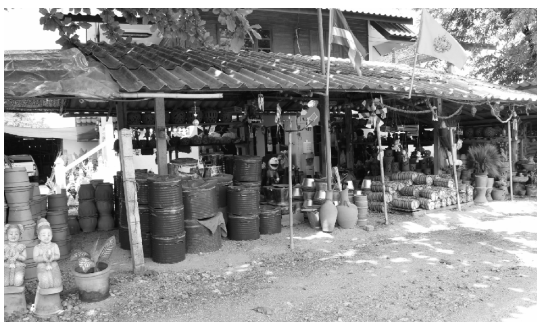


写真11 ライ・クワン村の小売店（野焼土器と火鉢の販売）



写真12 火鉢



写真13 火鉢の型による成形作業（小売店にて）



写真14 火鉢製作の仕上げ作業（小売店にて）



写真15 ムアングンの窯焼成土器

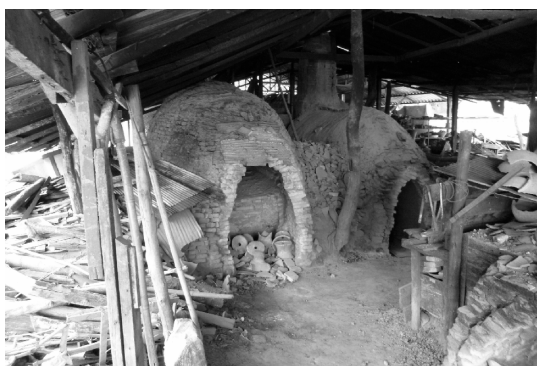


写真16 ムアングンの穴窯

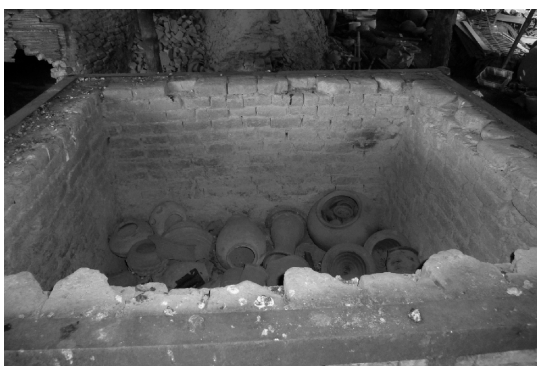


写真17 ムアングンの昇炎式窯

ミングで導入された理由は今回の調査では明確にできなかった。この回転台は、村で機械工として仕事をしている男性が、車の部品などを組み合わせて作ったものである。通常300パーツで販売するものを、知り合いのため、50パーツでゆずってもらったということであった。なお、前述のように、Dグループでは補助金を受け、1台1000パーツという高値で大量に購入しており、グループに属さない土器製作者の購入状況とは異なっている。土器1個を20B程度で販売することを考慮すると、300Bの回転台の購入はそれほど大きな投資とは考えられないが、回転台の使用は急速に拡大しているようには見えない。

4. ムアングン（窯焼成の土器製作村）

ムアングンは現在も昇炎式窯が主体である。昇炎式窯（写真17）は1日80個（小型品）、穴窯（写真16）の場合は2～3日で20個（大型品）焼成する。生産される土器は仏具と調度品が中心である（写真15）。2005年以降、何度かここを訪れたが、基本的には台の位置が高い回転台を女性が使用する。

2013年1月に村の案内図ができた。これはTrue Moveという電話会社が観光地としてネットに出すために作成した。実際に、観光客が来るようになったようである。現地マップではQRコードで情報が取得できるようになっている。5年前に木工品製作をおこなうバントワイと争って、ハンドン内でOTOPの1位になり（5星）、村の道に日よけを作ったという実績が、今回のTrue Moveとの提携につながったらしい。

現在、この村で独自に土器生産できる家は少数である。そうでない土器製作者は、Nongkaewの土器工場にはたらしにいつている。時間のあいたときにつくっている人（house No.145等）

は1日に2～3時間で20個程度つくり、家にある小さな昇炎式窯で焼く。以下、今回、インタビューできた土器製作者の記録を記す。

Dの家 インタビュー時は母娘で土器磨きをしていた（70代、50代）。土器製作が継承されている好事例である他にもNの家では10代の娘が磨き作業を手伝っていた。土器づくりを継承したいといい、実際に練習している。

Mの家（P氏の家） 10～20個くらいの小さな土器を外容器につめて、それを30個昇炎式窯で焼く。ライ・クアン村で製作するモーウプを、この外容土器として使用していた（写真8）。ムアングン村の土は混和材を使わないが、ライ・クアン村のものは混和剤が多いため耐火性に優れ壊れにくいという。しかし、前述の通りDグループの供給が追い付かないため、現在は自家生産している。野焼土器生産と窯焼成土器生産の共生を示す貴重な事例であるが、継続的な関係を保持できなかった点で、成功したとはいえない。なお、現在使用している窯焼成の自家製の外容器も長く使えるとのことであるが、真っ黒にこげたりし、割れ始める。そのため、針金で回りをくくって補強・修理して使用している（写真9）。

Hの家 4つのサイズの花火の外枠（土器）のうち最小のものをつくる。その奥の道に花火職人の家、さらにその奥にHの親戚の家があり、ここでは最大のものをつくる。村内の8番通りの土器作りは全て花火製作にかかわるものである。

以上のように、ムアングンでは専門的な土器製作を展開させ、大量生産を志向している。花火職人の家の周りに花火用の土製容器製作者が集まるなどの様相もその好例である。基本的に最初に訪れたときと同様の生産体制を維持しており、近年におけるネットでの観光誘致など、ライ・クアン村と比較すると安定的な展開をみせている。

5. まとめ

今回の調査では、過去の調査において観察できなかったいくつかの内容を確認することができた。最後にその内容をまとめると次のようになる。

- ①回転台の導入という、製作道具の変化がおこったが、急速には拡散していない。ただし、Dグループに土器製作を教えられた次世代の子供達が土器製作者になるならば、回転台の使用は急速に広まるものと推測される。
- ②回転台の導入の理由は、製作時間の短縮よりは、自らが回転する人間ロクロよりも身体への負担が少ないためと推測される。従って、必ずしも若い女性が積極的に導入するという性質のものでもない。もちろん、若いほうが習熟はしやすい可能性はある。
- ③新たに型成形を始める場合にも、野焼土器製作者が型成形をはじめるとはほとんどない。粘土紐積み上げ成形と型成形という、系統の異なる技術は、製作者が異なる傾向が強い。
- ④継続はしなかったが、窯焼成のための外容器の製作のように、野焼土器と窯焼成土器の共生が確認された。

以上のような内容が考古資料でも適用できるかどうか、中国を起源とする回転台や窯などの新しい技術が入ってくる日本列島の古墳時代や朝鮮半島の原三国時代でも適用できるかどうかは定かではなく、今後、追求せねばならない課題といえる。しかし、道具の変化や新たな技術は必ずしも機能的或いは効果的な成果をもたらすわけではなく、多様な契機があったことは今回の検討で明らかにできたといえよう。

本稿は、大阪大谷大学特別研究費補助金（長友朋子）の成果を含む。

引用文献

- 植崎彰一、リーダム・レファート、ルイス・コート2000
「東南アジア本土における現代の土器および焼締陶の生産に関する地域調査」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』8
- 北野博史・小林正史2010「東北タイの土器作りにおける道具の使い分けと器種・工程間の関連性」『歴史遺産研究』No.6、東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 北野博史2012「タイ国ウボンラチャターニー県ドンチック村の土器作り」『歴史遺産研究』No.7、東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 小林青樹1998「土器作りの専業生産と規格性に関する民族考古学的研究」『民族考古学序説』民族考古学研究会編、同成社
- 小林正史・徳澤啓一・長友朋子・北野博司2007a「北タイと東北タイの土器生産様式の違いを生み出した背景」『北陸学院短期大学紀要』第39号
- 小林正史・徳澤啓一・長友朋子・北野博司2007b「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける技術と生産様式の結びつき」『北陸学院短期大学紀要』第39号
- 庄田慎矢・安部久・能城修一・徳澤啓一・小林正史2010「土器作り叩き板の考古民族色舞楽的研究」『考古学と自然科学』第60号、日本文化財科学会誌
- 徳澤啓一・小林正史・長友朋子2006「西南中国における伝統的土器づくりの変容」『岡山理科大学紀要』第42号B人文・社会科学、岡山理科大学
- 徳澤啓一2008「雲南邊疆における伝統的土器製作の地域差と季節差」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究論集刊行会
- 徳澤啓一2012「タイ中部における伝統的土器製作とその変容—スコータイ県パーン・ナー・ワットライの事例を中心として—」『東南アジアの伝統的土器づくり』大阪大谷大学博物館
- 中園聡2010「弥生時代の考古学的再考」『季刊東北学』第22号、東北芸術工科大学、東北文化研究センター
- 中園聡・時津裕子2004「現代東北タイにおける土器製作に関する総合的研究」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 長友朋子2007「民族史事例から見た土器づくりと弥生土器生産体制」『土器の民族考古学』同成社
- 長友朋子2008「土器の規格度」『日本考古学』第27号、日本考古学協会
- 長友朋子2010「朝鮮半島における土器の技術」『侍兼山論集』第44号、史学篇、大阪大学史学会
- 長友朋子・中村大介2011「タイ及び雲南省の民族事例からみた土器製作の保守と変動」『古代学研究所紀要』第15号、明治大学古代学研究所

註

- 1) OTOPは日本の一村一品運動をモデルに始まったタイの特産物を通じた村おこしである。